

おさくの話

小川未明

青空文庫

おさくは、貧ますしい家いえに生うまれましましたから、小しょう学が校こうを卒そつぎよ
業うすると、すぐに、奉ほう公こうに出でなければなりませんでした。
「なに、私わたしが、いいところへ世せ話わをしてやる。」と、植う木えき屋やのお
じいさんはいいました。

彼女かのじよの父ちち親おやは、とうに死しんでしまつて、あわれな母はは親おやと
暮くらしてきました。おじいさんは、しんせつな人ひとであつて、なに
かに、二ふた人たりを気きにかけてくれたのであります。

「工場こうばへゆくよりか、夜よるは、勉べん強きやうでもさしてくださる、どこ
かしんせつのお家うちがいいと、おじいさんは心しん配ぱいしてしてくださ
るのだから、見みつかつて、そのお家うちへいつたら、よくいいつけを

守^{まも}つて、働^{はたら}かなけりやならないよ。」と、お母^{かあ}さんは、いいまし
た。

「お母^{かあ}さん、きつと、よく働^{はたら}きます。どうか、心^{しんぱい}配^{ばい}なさらんで
ください。」と、おさくは、目^めに、いっばい涙^{なみだ}をためて答^{こた}えまし
た。

「ああ、おまえが、その決^{けつしん}心^{しん}なら、お母^{かあ}さんは心^{しんぱい}配^{ばい}しません
。」

こう、母^{ははおや}親^はは、いつたものの、これまで長^{なが}い間^{あいだ}、二人^{ふたり}は、む
つまじく、朝^{あさばん}晩^{ばん}、顔^{かお}を見^み合^あつて、暮^くらしてきたのに、この後^{のち}は、
べつべつに生^{せい}活^{かつ}しなければならぬと知^しると、なんとなくさびし
くなりました。しかし、どうせ、娘^{むすめ}は、一度^どは世^よの中^{なか}に出^でなけれ

ばならない運命うんめいであると考えかんがると、こんなに氣きを弱よわくしてはし
かたがないと、強しいて、元氣げんきをつくつていました。

それから、間まのないことでもあります。

「おさくちゃんのいく、いいところが見みつかつたぞ。」と行って、
おじいさんは、ある日ひの晩方ばんがた、機嫌きげんよく、外そとからはいつてきま
した。

「まあ、おじいさん、それは、どうもありがとうございます。」「
と、母親ははおやは、いつて、おじいさんを迎むかえましたが、うれしいう
ちにも、いよいよかわいい娘むすめに別わかれなければならぬ日ひがきたかと
思おもうと、悲かなしさが、胸むねいつぱいになりました。しかし、それを押お
さえつけて、顔かおにあらわすまいとして、母親ははおやは、にこにこ笑わらい

ながら、

「ほんとうに、いろいろ心配しんぱいくださいまして、すみません。」
と、おじいさんの話はなしに、耳みみを傾かたむけたのです。

おさくは、だまって、母ははおや親なと並ならんですわり、自分じぶんの世話せわされてゆくところは、どんなところだろう……。自分じぶんみたいなものにつとまるかしらん？ なんとなく、うれしいような、悲かなしいような気持ちきもちを抱いだいて、目めをかがやかしながら、おじいさんの顔かおを見みつめていました。

「あちらさまは、もののがかったお方かただから、正しょう直じきにつとめさえすれば、長ながく、めんどうをみてくださるにちがいない。べつに、したくはいらない、ほんの身みのまわりのものだけ、まとめて

おきなさい。明みょう日にちの朝あさ、わしが迎むかえにきて、連つれてゆくから

……。」と、おじいさんは、ねんごろに告つげました。

やがて、おじいさんは、帰かえりました。その晩ばんは、母は親おやと娘むすめが、名なごり残お惜おしそうに、語かたり明あかしたのでした。

おじいさんは、約やく束そくどおり、朝あさになると、じきにやつてきました。そこで、おもしろいことをいって、二ふた人たりを笑わらわせたり、元げん気づきけたりしました。

「一じ時かん間かんとかからない街まちの中なかだ。たまには、ちよつとお暇ひまをもらつて、顔かおを見みにくるがいい。さあ、したくがいいなら出でかけるとしよう。」

目めを赤あかくした娘むすめをつれて、おじいさんは、出でかけました。母はは

親やは、独り残ひとされて、出でてゆく娘むすめのうしろ姿すがたを見送みおくっていました。

おじいさんは、おさくを静しずかな高台たかだいの門もんのある家うちにつれてきました。この屋敷やしきへは、おじいさんが、ときどき、植木うえきの手入ていれにくるのであります。

「まだ、なにも知しらない子供こどもで、たいしたお役やくにもたちますまいが、どうぞ、よろしくお願ねがいいたします。性せい質しつは、正しょう直じきで、いたって、さっぱりしていますが、すこし勝かち気きですから、そんなところも、お含ふくみおきくださいまして、よろしくお世話せわいただきとうぞんじます。」と、おじいさんは、おさくの方ほうを見かえつて、ていねいに、奥おくさまに對たいして、頭あたまを下げました。おさくも、

ただ、顔を真っ赤にして、おじいさんについて、頭を下げたのであります。

「いや、そういう子なら、わたしは好きですから、せいぜいめんどうをみますよ。帰ったら、この子のお母さんによろしくいってください。」と、やさしそうな奥さまは、いわれました。

話は、こういうようにして、まとまりました。それから、
 月あまりもたつてからです。

ある日のこと、おさくが、廊下のそうじをしていると、坊ちゃんほっのほうの室で、電球の破裂したときのような、すさまじい音がしました。

彼女は、なんだろうと驚いて、すぐにいってみました。する

と、そこには、十二と九つになる、二人の坊ちゃんふたりぼっがいて、おさくが、あわててはいつてきたのを見て、おかしがつて笑わらっていました。

「坊ぼっちやま、いまのは、なんの音おとでございますか。」と、たずねた。

「地雷じらいか火が、爆ぼくれつ烈したんだ。」と、九つになる、坊ぼっちやんがいきました。

「あの音おとかい、電でんとう燈の球たまが破やぶれたのさ。」と、十二になる坊ぼっちやんが、まことしやかに答こたえました。

彼女かのじよは、それらしいようすもなかつたけれど、目めを円まるくして、「まあ、あぶのうございますこと。」と、あたりを見みまわ

しました。しかし、べつに、ガラスの破片が飛んでいゝる気はしなかつたので、そうでないとわかつたから、そのままあちらへゆこうとしたのです。

「おい、もう一度、してみせようか？」

二人の坊ちゃんふたり ぼっは、そういつて、彼女かのじよを呼びとめました。おさくは、なんの音おとだろうと思つたので、いわるるまま、そこに立ち止どまつて、二人の坊ちゃんふたり ぼっがたのすることを見みていました。

「こんどは、僕ぼくの番ばんだよ。どちらの音おとが、大おおきいか、やりつこをしようね。」

そういつて、弟おとうとのほうは、ポケットから、三日月形みかづきがたに折おりたたんだ、紙製かみせいの風船球ふうせんだまを取り出だして、空くうき気をいれるべく、吹ふき

ました。見るうちに、風船球は、ふくれあがって、小さな掌上うえにころがりました。

「おさく、見ておいで、いいかい。」といって、右の掌みぎてのひらに、力ちからいっぱいいれて、ふいに、風船球ふうせんだまをたたきつぶすと、さすがに、すきまなく張はられているだけに、紙かみの球たまは、ひどい音おととともに、さんざんに裂さけて、掌てのひらの上うえに残のこったのであります。

「どうだい、僕ぼくのほうほうが、大きい音おとがしたろう。」と、小さな坊ぼつちゃんちゃんは、誇ほこらしげにいいました。

「よし、そんなら、こんど、おれがする番ばんだよ。」

上の坊うえぼつちゃんちゃんは、自分じぶんも、新あたらしい風船球ふうせんだまを取り出としました。これを見て、おさくは、二度ど、びつくりしたのであります。

「坊ちやまがたは、こんな遊びをするばかりに、新しい風船球をいくつも買っていらしたのだろうか？」

「坊ちやま、およしあそばせ。」と、彼女は、いった。

「なぜだい、僕たちのかつてじゃないか。」

「兄さん、お母さんといっしょにいつて、僕たちが買ってもらつたんだね。」

二人の坊ちやんは、彼女の干渉を気持ちよく思いませんでした。

「だって、もつたいないのですもの……。」と、おさくはいつた。

二人の少年は、これまで、女中などに、こんな注意

がましいことをいわれた、経験けいけんをもつていませんでした。

「兄にいさん、僕ぼくたちが、なにをしたって、いらんお世話せわだねえ。おまえ、もう、ここにおらなくていいから、あっちへゆけよ。」と、小さい坊ぼっちゃんがいいました。

「こんなものについて遊あそべんから、大きな音おとを出だそうと思おもつていたのだよ。こんなものを破やぶつたって、なにがもつたいない？」と、大きな坊ぼっちゃんはいいわけがましく答こたえました。

おさくは、りくつをいわれると、もう、これに答こたえることができなくなつて、目めに涙なみだかにじみしました。

「もつたいないことする人ひとは、ばかですわ。」といつて、あちらへ去さりました。

ふたり 二人の少年は、たちまち顔の色が、変わりました。

「ばかだといったな！」と、兄が立ち上がった。

「生意気だね、お母さんに、いいつけておやりよ。」と、弟も、つづいて立ち上がると、もう風船球のことなどは忘れて、二人は、廊下を駈けて、彼女のいった後を追いました。

日ごろは、女中に対して、やさしい、いい奥さまでしたけれど、この日ばかりは、怖ろしい奥さまに見えました。そして、厳格な言葉つきで、

「おまえが、ほんとうに、坊ちゃんたちに、ばかだなんて、失礼なことをいったなら、悪かったといって、おあやまりなさい。」といわれました。

おさくは、うつむいて、目にいっばい涙なみだをたたえていました。

けれど、どうしても、すなおに、自分じぶんが悪わるかったといつて、わびる気きになれないものがありました。

「自分じぶんのいったことは、まちがっていたらどうか？」……彼女かのじよは、こんなことを頭あたまの中なかで考えていました。

「悪いわると思おもつたら、はやく、あやまるものですよ。」と、奥おくさまが、つづけさまに、やや大きおおきな声こゑでいわれた。

このとき、おさくの目めに、哀あわれな自分じぶんの母ははが下したを向むいて、熱ねつし心に、風船球ふうせんだまを内ない職しよくに張はっている姿すがたが浮うかびました。朝あさ早くはやから仕事しごとにかかり、夜よるおそくなるまでしても、きめてある数かずまでは、容易よういにできなかつた。それに、まだ慣なれないうちは、糊のり

がよくついていないといって、問屋とんやに持もつて行ってから、母ははは、
 小言こごとを聞きかされて、しおしおと帰かえつてきたこともありませう。その
 ときのようすなどが目めにうつると、日ひごろから、一つの風船球ふうせんだま
 にも、貧ますしい人ひとたちの並なみならぬ労ろうりよく力が、かかっていると思おもつ
 た。自分じぶんの考かんがえは正ただしいので、それをそうとも思おもわぬほうが、な
 んといつてもまちがっているのだと思おもわれたのでした。
 おさくは、そんなことから、とうとう暇ひまを出だされてしまいました
 た。

「あんまり、強ごうじよう情じやうを張はるものでない。あんないいお家うちを、お
 暇ひまなんか取とらなくてもよかつたのだ。」と、植木屋うえきやのおじいさん
 が、いったときに、彼女かのじよは、お母かあさんが、あれほど、苦心くしんして、

風船球ふうせんだまを張はつていられたのを知るしだけに、なんの思いおもやりもな
く、たたき破やぶるのを見みると、つい我慢がまんがしきれなくなつて、失しつれ
礼いなことことをいったり、また、考かんえると、くやしくなつてきて、
ついで強ごうじよう情じようを通とおす気きになつたことも、おじいさんに物語ものがたつた
のでした。

「おまえが、いうことは、ほんとうのことだけれど、強ごうじよう情じようは
よくないことだ。正ただしいことはいつか、後あとでわかるあるときがあるの
だから……。」と、おじいさんは、おさくをさとしました。

おさくは、その後のちは、工場こうばへいって、働はたらくことになりました。
そして、お母かあさんに、孝行こうこうをしました。

植木屋うえきやのおじいさんは、しばらくたつてから、おさくの奉公ほうこう

した、お家へいって、植木の手入れをしていました。そのとき、奥さまは、出てこられて、おじいさんに、

「あの娘は、どうしました？ 正直ない子だったけれど、すこし強情のようでしたね……。」といわれて、

「あの娘のような考えをもつ子は、正しいのです。あの後でできた女中などは、ものを壊すと、しかられないうちに、『これを壊しましたから、私が、弁償します。』というのです。買って、返しさえすれば、なにをしてもそれですむという、ああいう考えをもつ子には、まことに困ったものです。」と、話されたのであります。

おじいさんは、縁側に腰を下ろして、きせるに火をつけて吹

かしながら、

「じつは、あの子のこ母親ははおやが、内職ないしよくに、風船球ふうせんだまを張はつてい
ましたので……。」と語りかたますと、やさしい奥おくさまは、いくたび
もうなずいて、目めに涙なみだをためて聞いていられました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 6」講談社

1977（昭和52）年4月10日第1刷

底本の親本：「未明童話集 4」丸善

1930（昭和5）年7月

初出：「教育研究」

1929（昭和4）年10月

※表題は底本では、「おさくの話《はなし》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：栗田美恵子

2019年9月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

おさくの話

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>